

## ミルトンにおける自然と超自然

室 田 五 郎

はじめに

英詩を読む者にとって、英詩の中の自然の役割がいかに大きいかが今更あらためて強調する必要はないであろう。超自然とは何かという問いにたいする答えはむずかしいが、超自然ということばは、自然ということばがあつてはじめて成り立つに違いない。そして時代が溯つて古くなれば古くなるほど、超自然は詩の中で大きい意味をもつてくる。

シェイクスピアの作品には超自然が使われているといわ

れているから、そこで超自然について次のような解説を紹介しよう。

「エリザベス朝の人々は、すべて超自然的な媒介の力を信じていた。この民間信仰はシェイクスピアの劇の少なくとも半数にあらわれている。魔女、幽霊、悪魔、占い、及び占星術への興味などが、シェイクスピアが劇に利用する超自然的現象の中に数えられるのである<sup>(1)</sup>。」

ミルトンもいくらか民間信仰に興味があつて、若い頃の姉妹詩 *I Allegro* と *Il Penseroso* の中にしるした<sup>(2)</sup>。更に *Comus* や *Lycidas* の中に 'genii (genius の複数) という守護靈的な存在も大きな役割を演じる。これらもミルト

ンの青年時代の作品である。*Lucius* の中ではそれらは、本来の異教性はすでに失われている。<sup>(3)</sup> ミルトンは一貫して聖書の立場をとり世界が創造主と調和することを自然と考<sup>(4)</sup>えた。

ミルトンの叙事詩に超自然があると考えれば、神に祝福された自然からはずれているもの、そしてその自然を脅かし、襲うものという存在になるだろう。そういうものとしてはサタンおよびその配下の天使たちということになる。なぜならそれらは、神の創造の調和と秩序とは異質な存在となつて神と対立し、神の被造物たる人を襲うからである。

はじめに、ミルトンが叙事詩、とくに『パラダイス・ロースト』でどのように自然を位置づけているかということから始めたい。

## I

よく知られているように、叙事詩は「あらゆるものの物語」であり、知識の宝庫又は要約とよばれる内容を伝統的に意味している。そして『パラダイス・ロースト』の中で

ミルトンは、聖書のテーマを用いつつも、古典的な哲学や神話をも用いていることはよく知られている。自然を語る場合にも、それはあてはまるのである。

聖書によれば、われわれが言うところの自然は、「自然」と記されるばかりではなく、「万物」とか、「すべてのもの」とか、「被造物」とか「万象」などがあり、又「神のわざ」という言い方もされている。そのように聖書的には、自然は神が創ったものであるというのが一貫した主張である。

はじめに神は天と地とを創造された。地は形なく、むなく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。  
(創世記一・一二)

自然が形をあらわす前にカオスがあったとするヘシオドスやオウウィディウスの考え方が、ミルトンの創造物語に色こく影きようをあたえたと指摘<sup>(5)</sup>されている。神はこのカオスに、神のロゴス、即ち御子によって、創造のわざを行い、宇宙を創るのである。(PL VII・一六三)。(ヨハネ一・一三)

しかしこのカオスはどこから来たのか、という問いの答えは、ミルトンにとって、はじめからカオスがあったはずはなく、神なしではカオスは考えられないということになる。ミルトンは一般的に、神が無から (ex nihilo) 創造したという考えを採らず、神が神自身から (ex Deo) 創造したと主張する。それはすべての起源は神にあるということと、神の創造したものはすべて善にして聖であるという主張に通じる。<sup>(8)</sup>

神はこのカオスを用いて「自然」を創ったとミルトンは考える。「自然」は神のロゴスによって秩序と調和をあたえられる。すなわち宇宙という秩序と調和の世界がカオスの中に創られて存在する。カオスと自然とは劇然と区別されていて、カオスは神の秩序にくいこむことができない。『パラダイス・ロースト』には次のように記されている。

ここに自然は、まず

その最果てなる境界を始め、カオスは退く

最前線のとりでから、破れし敵のごとく

(PL II 一〇三七—九)

この詩の中で悪天使サタンが地獄の中から脱出してカオスを通りぬける場面がある。それは上下左右全くわからぬ熱風逆巻く世界なのである。そこにカオス王が支配している。カオス王は秩序の敵である。サタンはカオス王に天国に接するカオスの国境への道案内を乞うている。

案内せよ、

案内あらば決してけちな報いとはならぬ  
汝の益の為、もしかの失せし地域をわれが  
すべての篡奪をそこから追払ってもと通り  
はじめのやみに返し汝らの支配に復帰させ  
(これこそわが目下の旅の目的) 又再び  
老「夜」の旗印をそこにたてるならば、  
全利益は汝らに、復しゅうはわれにあらん。

(PL II 八〇—八七)

すなわちサタンは、神への復しゅうとして自然の秩序と調和を破壊してもとのカオスに返すことを、カオス王に約束して、上下左右のわからぬカオス内の道案内を乞うているのである。秩序の出現を嫌うカオス王はサタンが新しい

宇宙の出現を無きものにしてもと通りのカオスにしてやるとの約束を信じて希望を抱きサタンの頼みに応じて道案内をする。

## II

創世記には次のような記事がある。

神はまた言われた、「われわれのかたちになれわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものとを治めさせよう」。

(創世記一・二六)

神は祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」。

(創世記一・二八)

以上の創世記二ヶ所の記事は、ミルトンの詩にも、ほんのわずかのちがいを除いて、そのまま復唱されている。<sup>(9)</sup> ミルトンは、神が人に治めさせようとした楽園の自然が人手

にあまるほどに混乱を招きそうな状態を描いているが、Fowler は、神が「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」といったのは、自然を治め、地を従わせるために、人がふえる必要があったのだろうということを暗示している。<sup>(10)</sup>

神が人に自然を治めさせたと聖書に記されていることを、ミルトンは、人は他のものを支配し、自らを知り、神と交わるにふさわしい高い心をもち、万物の長として神を崇めるものであり、<sup>(11)</sup> 他方、地上の自然は限りなく多種多様で管理を必要とし、ときには荒々しくなるという意味に解釈しているようである。

神が創造した美しくゆたかなものにはこのような性質があつて、ミルトンはエバの美しさと関連させているらしい。<sup>(12)</sup>

大地は必要以上の潤沢さを生み出している。<sup>(13)</sup> それは過剰なゆたかさであり、グロテスクなほどであり、パロディックとさえいえる。それが快適に繁茂するためには、切り捨てるに惜しい部分まで切り捨てて調整を必要とする。アダムとエバが楽園において互いに別行動をとって能率よく仕事をしようとしたのもそのためであつた。<sup>(14)</sup> ただし、このアイデアをだしたのはエバの方であつた。<sup>(15)</sup>

ミルトンが若い頃にかいた『コーマス』という仮面劇の

中で、自然の恵みのゆたかさについて、少女とコーマスのやりとりがある。コーマスは自然がゆたかであるからといって快楽をすすめるのにたいして、少女は、自然は「善意なるまかない」であって、自然がその富をもって人に放縱になれば望んではいけないこと、放縱になることは、自然に罪を被せることになる<sup>(17)</sup>と主張する。

『コーマス』の中のこの議論はミルトンの言わんとするところを充分に言いつくしていないように思われる。なぜなら「自然に罪を被せる」とはどういうことかはっきりしないからである。しかし『パラダイス・ロースト』では、もっと明らかにする。すなわち、天使ラファエルがアダムに語っているところで、アダムがエバの美しさに圧倒されていることを告白しているが、そのときラファエルが同様に自然に罪を被せることがないように警告しているからである。

ラファエルは、神につかわされて、サタンの誘惑におちいらないように警告に来たのであるが、ラファエルはたしかにアダムがあやうい状態にあることを発見する。神のめぐみは溢れるばかりにエバの美しさの中に示されていて、それにアダムがすっかり有頂天になっている。そこでラフ

アエルは「自然を咎むな、自然はその分を果せり／汝は己が分を果せ」(PLⅧ五六一一二)といつてアダムを叱る。

アダムは神の祝福をうけていた。エバがアダムのこの上なき伴侶として、あたえられたからである。しかし、神のめぐみが溢れるばかりにあたえられて、かえって、神のわざなる自然に目がくらみ心うばわれ、神を忘れてあやまちを犯す可能性をラファエルはみたのである。それは神が悪いのだろうか。神には善意しかないのである。それゆえ、ラファエルは、「自然を咎むな」というのである。

『コーマス』の中のコーマスの議論はとくに悪意にみちたものではない。自然がゆたかにあれば、飽食をたのしむのは人情であらう。それが自然な生き方とさえいえる。だがミルトンは、善いものは善く用いられてはじめて善いものとなるという考えをもっていたのだから。善いものを悪く用いないように注意しなければならぬと常に警告しているように思われる。

人は自然を用い治めるべきで、自然を濫用したり、快楽に用いたりしては神に忘恩となり、感謝をしなくなる<sup>(18)</sup>。本来善いものも使い方次第で善くも悪くもなるといえよう。聖書の物語を聖書の精神に沿って書こうとするミルトンに

とつて、本来善なる自然が、いかにすれば人にとつて悪とならず善となるかという問題を重視したのは当然すぎるほど当然であろう。

### III

先にのべたように、創世記には、神が人に自然を治めさせようとする意志があつたことがしるされている。それは人に無条件にあたえた自然に対する支配権であるようにみえる。だが果してそうだろうか。アダムとエバは神の禁令を破つてしまったとき、神は次のように言っている。

「地はあなたのためにのろわれ、  
あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。」

(創世記三・一七)

人は自然を治める立場に定められながら、罪のゆえにのろわれた自然に苦しめられるというのである。人が自然を治めるということが祝福でありうるには条件があつたとみるべきであろう。このゆえに人と自然との関係は契約的であ

あるとみていいのではないだろうか。

しかし聖書に、神が、自然を支配する權威と能力とを人から取り上げたとはどこにも記されていないのであるから、人は神に対する不服従を維持しながら自然を支配しつづけることをゆるされている。自然は人によつて支配されていることに甘んじていなければならないのである。ミルトンは『キリスト降誕の朝に』という若い頃の詩に、自然が「恥じて」<sup>(19)</sup>いると言っているのは、滅びた人の支配に屈従していることを恥じていることを意味したのであろう。

自然は支配者の没落と共に没落したのであり、自然も人の支配に服したのは不本意であつて苦しんでいると聖書はしるしている。「地はあなたのためにのろわれ、」<sup>(21)</sup>というのは自然ものろわれていると理解できるからである。自然は神による被造物であり、人に支配されるが、神から託され預かつたものというのが聖書の精神であらう。

アダムとエバが樂園から追放される前に、自然はまず兆(sign)を示した。それは凶兆(omen)であつた。<sup>(22)</sup>それは神が示した追放への前ぶれであつた。ミルトンは、神が自然を用いて人を恐れしめ、不安をあたえることにより御自身の意図を明らかにすることがあることを信じていたのであ

ろう。それは神に服従する自然であるが、人にとっては脅迫的で不服従の兆がそこにあると読むことが可能である。

創世紀の中のノアの箱舟の物語は、明らかに、自然の猛威が人を滅ぼすというおそろしい物語である。これは神が自然の力を用いてノアとその家族及びえらばれた生きものを除いて滅ぼそうとされたことを示す物語である。神はしばしば自然の中にご自身をあらわすので自然は神のごとく人を罰し滅ぼす。そして、ヨブ記の「天が下にあるものは、ことごとくわたしのものだ。」(四一・一二)という神のことは、神が自然を用いることを示す。そして人は神の全能をやる。ヨブはいう、

「わたしは知ります、

あなたはすべての事をなすことができ、

またいかなるおぼしめしでも、

あなたにできないことはないことを。」

(ヨブ記四二・二)

人が地上の万物の長であることは、人が自然の外にいないわけではないことを示している。人はヒューマン・ネイチ

ヤーとして自然の中の一部である。もし人が神に罪を犯すならば、他の人からのさばきをうけ、滅ぼされることもあると考えられなければならない。創世紀の中のカインがアベルを殺した記事にこれを見ることができよう。

カインは、神に罰をうけて地上の放浪者となるが、「わたしを見付ける人はだれでもわたしを殺すでしょう。」<sup>(23)</sup>といった。カインは神の特別な意図をもって、保護されたが、カインが「土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません」という自然の呪いを受けたと同時に、人の呪いをもうけることをおそれたことを意味する。

神は地上の万物によるのみならず、他の人をも用いて、正しいさばきを行なうとミルトンは信じている。たとえば神が王政といういまわしいものによって、欲望と情熱に狂った人々を束縛し苦しめることもあるということを主張している。<sup>(25)</sup>といっても王政そのものがよいと弁護するわけではない。なぜなら、神に従う良心にめざめた人は悪い支配者に対立することもありうるという契約的考え方が一方にあるからである。

このような考え方はミルトン特有の考え方とはいえないようである。<sup>(26)</sup>

#### IV

一七世紀に考えられた自然というのは、多くの伝統的な考え方を含んでいたことはいうまでもないが、神学的形而上学的な色のこいものがあつた。ミルトンの考え方は、自然が神自身から創られたという独創的なものであつたので、本来自然は人の罪が地上に入らなかつたならば、やがて人が天使のようになることを助けるものとなつただろうというアウグスチヌスの考え方を強めこそすれ弱めるものではなかつたといえよう。

又「存在の大きいなる連鎖<sup>(28)</sup>」としての世界は神・天使・人間からずつと下って目にみえない被造物に至るまでのすべてを含んでいたが、これは「造る自然」(natura naturans)と「造られる自然」(natura naturata)に峻別される。前者は神であり、後者が、神以外の被造物なのである。前者は不動不変の法則によって後者を統御する<sup>(29)</sup>。

ポープが「第一に自然に従え<sup>(30)</sup>」といったとき、自然とは、理性、法則、古典を意味したといわれる。ミルトンの詩『パラダイス・ロースト』は「正しき理性<sup>(31)</sup>」ということ

ばを「理性」と合わせて用いる。それは、天使が自由意志をあたえられたが、そこから神への反逆がおこり、その反逆が、同じように自由意志をあたえられた人間の世界に入ってきたことへの反省と無関係ではない。

人は自由意志によって、しばしば神からはなれてしまふ。しかし人以外の万物は神の定めた法則に従っているとこの考え方は、ワーズワスにさえも見られる。それは一七世紀の人が「自然の書<sup>(32)</sup>」をよめば、神の配剤の力を理解できると考えたことと軌を一にしているであらう。そして、自然が人の正しい生き方を示す、みちびきであるという考えにもとづいていたからであらう。

果して自由意志をあたえられた人間が、本能とか、反射行動に従っていたり、物理的法則以外に行動しようのない自然の姿から倫理的なことを学びうるかどうか問題があるとしても、「わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである。……もし、欲しないことをしているとするれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。そこで善をしようと欲しているわたしに、悪がはいりこんでいると



いう法則があるのを見る。」(ローマ書七・一五—二一)というパウロの言葉には「汚れなき自然の健全な法則」<sup>(34)</sup>の喪失ということをおわせるに充分なものがある。

ミルトンは、神の創造のときにはじめに存在していた人の中の神の像(すがた)が、人の罪による「汚れなき自然の健全な法則」の病変の時点で汚されて、その結果人が苦しみ<sup>(35)</sup>に呻吟するようになったと『パラダイス・ロースト』の中で天使ミカエルにいわせている。

ここにおいて自然とは何かということを再び吟味し直す必要がでてくるであろう。一八世紀におけるような、理神論的な自然では人は自分の道を真にただしうるものがないとしても、どのような法則をもつて人は祝福を望みうるか。

『パラダイス・ロースト』の中で天使ミカエルはアダムに「たとい自然に合致しているようにみえても、何が最善であるかは、快楽を基準にして判断してはならぬ」<sup>(36)</sup>という。

ここでミカエルは、人間はそういう感覚的なものをこえたもっと高い目的のために、すなわち、神と共に歩むために造られたのであるとさすのである。それは「自然法」に適う生き方なのである。

つまり自然ということばの概念が、罪が世に入ったため

に違うものになってしまったのに、それを自然であると考えつづけることに矛盾がおこる。自然が実は自然でないということになる。自然ということばの意味のむずかしさは、この矛盾からくるように思える。ある場合に自然はよいことを意味し、ある場合に自然はわるいことを意味する。

「自然法」という場合、自然はよい意味であって、「世のはじめからぬ先からあらかじめ定めておかれた」<sup>(37)</sup>(第一コリント二・七)とところの自然の道をさすが、「自然の人は神の靈の賜物をうけいれない、それはおろかなものだからである」<sup>(38)</sup>(第一コリント二・一四)という場合は、わるい意味に使われている。もちろん自然を霊的なものとの対照として考えるとき、よくもわるくもない場合もあることをつけ加えておく。<sup>(39)</sup>

このようにみえてくると自然ということばの使いわけは、基準のちがいにすることがわかる。神が意図した、神に一致する霊的な調和と秩序をもつ世界を基準におけば、神に反逆した肉体的な罪と混乱の世界は自然ではなく、不自然な世界である。<sup>(40)</sup>その世界は喪失の世界であるが、それ以外の世界を知らないの、それを自然と受入れている世界であ

る。

しかしミルトンは聖書にもとづき、聖書の精神を明らかにしようとして叙事詩をかいた詩人であるので、彼の言う「正しき理性」も「自然」も、基準が神中心であることは言うまでもないであろう。

## V

実際に超自然の世界があるかどうかは別として、文学の中にでてくる超自然はどういうものか正確にわからないが、「こちら側」とはちがう「あちら側」の世界、そして異次元の世界の中のものというように、便宜的に区別して話をしてみたい。

「こちら側」の存在は「こちら側」の存在の法則又はルールをもっていて、「あちら側」の存在は全く異次元の法則又はルールをもっているならば、偶然にか、必然的に、両者が出合うことがあれば無事にはすまないだろうと想像できる。そこにはおそろしい衝突がおこるか、とりかえしのつかない悲劇がおこるであろう。

もし「こちら側」の存在が、「あちら側」の存在と敢て

出合おうとするならば、そこには危うい事件がおこるかもしれないぬから、和解の儀式が必要となるかもしれない。又心を交わそうとしても不可能かもしれない。もし何らかの手段で、「こちら側」の存在が、異次元の「あちら側」の世界に入りこむことに成功しても、そこから再び帰ってくることは不可能かもしれない。又は儀式を必要とするかもしれない。

人の想像力は限りなく幻想を生み、想像力は種々なる異次元の世界をかけることができる。異次元の世界といっても、必ずしも遠い国とか、古い時代などのように空間的に時間的に遠くにある必要はないであろう。すぐ隣りに異次元の世界があると想像することもありうるであろう。

人が死ぬと他界し幽明境を異にすると考えると「こちら側」の人が「あちら側」の存在になってしまい、再び帰ってこない。人が他界者を身近かに感じて慰める儀式を行なう。「あちら側」の存在が怨霊となって「こちら側」の存在を脅すこともあろう。人は怨霊をおそれ、鎮める儀式をするかもしれない。それも一種の和解のため、悲劇をさけるためであろう。

ミルトンが一貫して語る立場は聖書的であるから、ミル

トンにとって「こちら側」は神の立場である。したがって『パラダイス・ロースト』の中における自然は、神が創造のはじめに定めた聖なる自然である。それでは「あちら側」は何か。それは神に反逆した天使サタンとその配下の天使たちである。

しかしサタンははじめから「あちら側」だったわけではない。反逆してそうなったのであり、それ以前は神につかえる他の天使たちと同じであった。ではどうして異質な次元に変化してしまったのか。ミルトンによれば、神が天使にあたえた自由意志を、この天使は神に服従するために用いず、かえって神に戦いをあげるために用いたからである。

神は自ら創造した秩序の中に異質で不自然な「罪」が生じたことを認め、天の戦いの結果御子の圧倒的勝利によりこの天使とその配下を地獄に封じこんだのである。しかし敗北したこの天使は復しゅうの念にもえて、人の住むこの世界にやってきてアダムとエバを誘惑する。そして神の定めた調和と秩序に反する罪を人の心に植えつける。人は神によって与えられた自由意志を神にたいする罪のために用いてしまうのである。

サタンが神の自然にたいする反逆者であり、敵対者であって、異質な存在に変質した存在であるが、人にとっても異質な存在であり、おそろべき存在であり、サタンが人と出合う時は、人の意表をつく方法をもつてなされ、そしてその結果は、人にとってもはやとりかえしのつかない悲劇となってしまった。サタンのもたらしたものがいかに異質なものであるかをミルトンは『パラダイス・ロースト』において熱心に語るのである。

今の人間世界で一般的である病いも苦しみも悪も罪も死もいかに不快で、異常で、謎めいた不自然なものであるかをミルトンはサタンのアレゴリカルな近親者なる「罪」と「死」の動きを通して示していく。しかしこれらはアダムに幻を通して示されるのであって、アダムの子孫にたいする責任を彼にわからせようとして見せる幻なのである。未来のことはまだ何もしらないアダムにとって、この幻はすべて異様なものに映ったとしても不思議ではないが、楽園追放の前には罪を認めて悔い改めたアダムの目が、改めて罪のもたらした結果がいかにおそろしいものであるかをしらしめられたのだということができであろう。

神の創造のはじめの自然がいかに本来の自然であろう

と、神がノアを呼ぶときにはすでに地上は暴虐で満ちていた。「すべての人が地の上でその道を乱した」<sup>(41)</sup>からである。そこには神なき状態こそが人の自然であったといつて過言ではなからう。「主は人の悪が地にはびこり、すべての心に思ひはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた」<sup>(42)</sup>と聖書はしるしている。そして罪が何であるかすらわからぬ世界であつただろう。

さて神は人を地とともに滅ぼそうと決心されて、ノアとその家族およびえらばれた動物たちを箱舟に収容させて洪水をおこして、神を信じなかった人たちをすべて滅ぼしてしまつた。神はノアの子孫から民を神自身のためにおこすが、アブラハムをおこし契約を立てて本格的にその一歩をふみだした。それはアブラハムの子孫に神が具体的に永続的に神の正しい道を示し、それによって罪の道から彼らを救い出そうとするためであつた。

神はアブラハムの子孫と契約を結びつつ、神の律法を彼らにモーセを通してあたえ、神の創造にもとづく本来の自然法則を回復しようとしたとみてよいであらう。そのために神は律法を人にあたえた。そして聖なる律法があたえられなければ人は神の目的も、意図も、正しさも、祝福もわ

かるはずもなかった。彼らにとって律法を守るとは義務であつた。

ところがここで又問題となるのが、自由意志と結びついてはなれない罪の法則が義務を妨げるということである。すなわち人は天体や動物のように、はざれることのできない法則に忠実に行動して、神に服従するような存在ではないのである。たとえそういうことができる存在であつても、心は神をしらぬゆえに肉体の本能的な衝動を正しいとする。聖書はそれが靈的に死んだ状態であることを訴えている。

「さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪によつて死んでゐた者であつて、かつてはそれらの中で、この世のならわしに従ひ、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている靈に従つて、歩いていたのである。」  
(エペソ書二・一二)

「空中の権をもつ君」<sup>(43)</sup>とはサタンであり、それは人の中に働いて罪に人をとじこめている靈である。そしてそれとは知らずに罪の奴隷となつてゐるすべての人は「生れなが

らの怒りの子」(エペソ書二・三)なのである。

怒りの子たる人の世界に、時みちて御子が生まれ、福音の伝道をはじめたのは、人々の心にある罪を悔い改めさせ、神の權威をもつてゆるし人が義務や形によらず、「霊」とまことをもつて<sup>(44)</sup>服従することを可能にするためであった。そしてそれは、全く罪に沈んだ世界が予想もしなかった出来事であった。

律法について学び、神の命じるいましめに通じていた神の民もその心はサタンに支配されて罪に閉じこめられていたとすれば、まずその罪を悔い改めさせ、かつゆるして、神を讃美させ、神の名によって生まれかわらせるといふ御子のわざは、サタンのわざに対立し、かつそれを破壊することを目的とする<sup>(45)</sup>。

だがそのような大事件は悲劇なしには始まらなかった。

「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた。彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。」

(ヨハネ一・九～一二)

罪を当然のように正当化する人の世が、本来受け入れて然るべき神の代理者を、自らの破壊的、暴力的法則の命じるままに拒み、最高の憎しみをもつて扱い殺してしまふ<sup>(46)</sup>。

しかし聖書の物語は悲劇で終るものではない。そのメッセージは、神と人との和解と、それによる人の救いだからである。そして又聖書のメッセージは決して神とサタンとの和解ではなく、むしろサタンに対する神の勝利なのである。

サタンが人の意表をついて現われ、その出会いが、人に悲劇的な結末をもたらしたことは先にのべた。しかしその悲劇により世界がサタンの支配下に屈したために、神の代理者たる御子の登場は、当座における神の側と人の側のはげしい出会いとなり、神の御子を殺すという事件となった。それは人の世界が神に敵するものに変質していたからだ。しかしそれは神と人との和解のための預言された犠牲の儀式ともいえる<sup>(47)</sup>。しかし永遠の視点からみれば神の救いの計画なのである。そして、この救いは御子の復活と昇天ということによって保証される。しかしこのことはサタンにとつては「死」の無効<sup>(48)</sup>を意味し、サタンの支配の無効化<sup>(49)</sup>を意味する。

御子の「神の国」運動は、この世に神の国が突入したことを意味するが、そのインパクトは、神の側のサタン支配に対する攻撃と考えられよう。御子は弟子たちに語った、

「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た。」  
(ルカ一〇・一八)

それゆえ福音のメッセージは、地上における罪にけがれた自然を、創造のはじめの聖なる秩序の自然へと回復するための、人になりたいするメッセージであると同時に、秩序と調和を乱してしまったサタンにたいする神の勝利の宣言なのである。

## VI

ミルトンは『パラダイス・ロースト』を叙事詩の伝統に従って、祈願ののちに物語の中心からはじめるが、それは地獄の世界におとされたサタンの動きに焦点をあてている。叙事詩は伝統的に英雄の物語であるので、そのよみ方からするとサタンが英雄ということになってしまふ。しか

しミルトンの英雄論<sup>(50)</sup>はこの詩の中にもでてくるが、ミルトンがサタンを英雄扱いしていないのは明白である。

だが何と魅力的で、すばらしい英雄のようにサタンが描かれていることだろうか。実は、サタンを伝統的な英雄のようにしてしまったのは間違いだったとは思えない。伝統的な書き方について、それ以上の意味をミルトンはサタンにあたえたのであろう。彼はあえて読者に混乱をあたえようとしているのであろう。

この詩の最初から見ても、この物語の中でサタンが悪の存在であることは明白である。しかしだから悪の存在をみにくく、卑小な存在と期待することは、悪の本質を見失うであらう。この詩の中でサタンは、あまりにも人間的な英雄像に近くて、いやそれ以上にすばらしいので、一般的な悪のイメージにあてはめることをちゅうちょさせられるのである。

サタンは神に対立し、反逆した霊である。神は絶対者であり、全能者であり、創造主である。サタンは神によって造られた霊的生命の存在である。両者は全く比較にならない存在である。サタンがどれほど壮大で偉大で、輝かしくても比較にはならない。だからサタンがどれほど英雄的で

も、人の想像できる範囲内のことである。それがこの叙事詩をよむときの心構えとならなければならない。

だからサタンの神に対する反逆は、神の勝利とサタンの敗北に終り、サタンは地獄に呻吟しているのである。だが力では敗けた反逆天使は、別な方法で復しゅうを考える。そして敗けたとは思わないのである。むしろもう少しで神を脅かすこともありえたと読者に思いこませるのである。

天の平原にて勝敗つかぬ戦いをなし、

彼の王座をゆるがせり。敗れしも何ぞ

すべて敗れしに非ず。不屈の意志あり

復しゅうの追求心、不滅の憎悪

絶対にゆずらず従わぬ勇氣あり

されば、征服されぬもの他に何あらん

(PLI・一〇四—一〇九)

天使は霊であり不滅であり、自由意志をもつ神の被造物である。被造物ではあるが、これだけの性質を与えられていることははじめに絶大なる神からの祝福をえていることを示す。だがその自由意志は本当に自由であるならば、神

に反逆することも自由である。サタンの強みは反逆しても不滅でありうることで、霊的存在であるために、その意志、憎悪、勇氣こそは何ものにも、神によっても、絶対に束縛をうけないということである。この確信をもってサタンは、神に造られたものでありながら、神と全く異質な次元に変質してしまったとミルトンは語るのである。これがどのように神に復しゅうをするのであろうか。

いかなる善も我らのわざとならず

常に悪をなすこそ我らの唯一の喜び、

そは彼の高意に逆らうことなれば、

我ら抗らう者故、もし彼の摂理

我らの悪から善をひき出すことを求めば

我らの働きの目的をくつがえし

善から常に悪の手段見出すこととなるべし。

そは時に成功し、かくて、おそらくは、

彼を悲しません、狙い違わずば、又妨げん

彼の意中の意をも、所期の目的狂わせて。

(PLI一五九—一六八)

ここにてくる善悪の問題は注意を要する。ミルトンは聖書の立場を原則として貫いているので神中心の発想であることはいうまでもない。それにしても徳目的なことではなく、聖書的には神の善は神の目的にかなうことである。それは神の創造のはじめの自然においてはすべての被造物の利益なのである。だから神のなすことすべてが善であって、神が自らの原則に反する悪をするはずがない。

善とか悪とか、というのは一方があつて他があるという関係であるとするれば、「こちら側」の善が「あちら側」の悪であるということもいえよう。神が善をなすとき、サタンは自分にとっての善をする、つまり神にとっての悪をすることをよるこびとする。<sup>(53)</sup>サタンはこのような確信にめざめたものとしてミルトンは描き、神とサタンが全く次元の異なる存在になったことをしるしている。そして言う。

天なる靈にかかるひねくれが住むか？

高ぶる者を説得する何の徴しがあるか

又何の不思議が頑固者を悔改めに動かすか？

(PL VI 七八—九〇)

このようにサタンは自由に神に復しゅうするものとなつて、地上の人に出合うのであるが、サタンがはじめてアダムとエバを見たときにその光景は「憎むべき光景」であり、サタンは自分が地上に来て地獄になげこまれている呪いを自覚しているのである。<sup>(54)</sup>この異次元の他者は、空中においてその心の中の怒りとしつと絶望のゆえに、他の天使たちに反逆天使であることを見破られぬように、心中の動揺をつくるわねばならなかった。<sup>(55)</sup>

しかもサタンは地上においては、狼のごとく、又は盗賊のごとく「神の設けた檻」の中にしのびこんだのである。<sup>(56)</sup>はじめ鴉のような姿をして生命の木にとまったが、獅子となり虎となり、<sup>(57)</sup>アダムとエバの会話を立ち聞きし、蝦蟇に化けてエバの耳もとでうずくまって悪夢を見させていた。それが見回りの二人の天使たちに発見されて正体をあらわし、凄惨な姿をあらわした。サタンはこれらの天使と激論を交わしたが、天使の警備隊長ガブリエルのところに拉致されていく。一戦なかるべからずとガブリエルは警備隊全員に警戒態勢をとらせる。ガブリエルとサタンの大議論がおこるが、サタンは武力に訴えようとして巨大な姿にそびえ立った。



恐怖に絶望的となったサタンは一触即発の勢いとなったが、神が宇宙の大混乱をさげさせるために、天空に一つのしるしを示したために、抵抗することなくその場から逃げ去ったので、天の戦いの二の舞いにならずにすんだのである。しかし天使の警戒をさけて暗闇や夜をえらんで再び樂園に戻ってきて、蛇をえらんで、体内に入りこんだ。それは天使たちの目をのがれるためであった。

そうやってサタンはアダムと別行動をして一人で働いているエバに接近することができたのである。破壊的な悪意と怒りにもえているサタンは、意味ありげにエバの前に行動して注目をひき、出合いのあいさつをする。蛇がことばを出すことの不思議さの理由を問われて、神が禁じた木の実を食べたためと答える。その木がどこにあるかと問われて、蛇は案内する。しかしためらったエバに善悪を知る木の実には運命をのりこえる力があり、現にそれを自ら経験したと語って、その実をたべれば神々のように目が開くのだますのである。

## むすび

万物は神の被造物であり、神の目的にかなうように創造されたのである。しかしその中から神の創造の秩序と調和を内側から破壊するものが出現した。それは霊的な存在として神の敵となり、天から追放されて人をも罪におとし入れてしまった。

人は地上の自然を治めるべく神の命令をうけていたが、自然は人の罪のゆえに呪われ、人に呪いとなった。人はそれでも自然にたいして治めるものでありつづける。自然とは実際、人の支配管理に服しつづけているが、実は神のものであり、神がその摂理のために用いるものであるということができる。

これまでに人の心は自然にたいする古典的な見方を変えてきたといわれるが、自然は神の力や神の知恵を人に示しつつけたといえよう。人がそこに神の姿を見、神の声をきいて、自分の生き方を反省することができたとすれば、わるいことではないが、一方では、地上における、人間以外の自然が、意識的に神に服従しているわけではないことも

事実である。

罪におちた（ことを意識しようと、するまいと）人にとって、人の自然な生き方は、むしろ快楽の追求であつて、心の快楽、肉体の快楽、及び罪の快楽などであつて、それが善となつてゐる。それが自然な生き方だとすれば、神なき自然な生き方といえるだろう。それゆゑに、そこから、創造のはじめの自然の秩序や調和がどんなものかわからない。ただ外に見える物理的自然が目映るのみで、それはあまりに無力である。しかしポウプもワーズワスも、自然は神の知恵を示す声のようにきこえたにちがいない。

聖書により、又それにもとづく『パラダイス・ロースト』によつても、このように人と自然が、同じ被造物でありながら互いに調和のないものとなつてしまひ、時には甚だしく不調和であるのは、人が神にそむいた罪のためである。しかしそれをもたらししたのは人間自身ではなくて、はじめに神の創造の秩序と調和を内側から破壊した霊のしわざである。したがつて神にとっての敵はこの悪霊であつて人ではない。又人にとっての敵もこの悪霊である。この悪霊が人の世界に入りこんで地上の調和と秩序に災いをもたらしした。

この悪霊すなわちサタンは『パラダイス・ロースト』の一・二巻において、読者を魅了し感嘆せしむるほど、壮大に、威厳にみちたものに描かれてゐるが、いつわりにもちて、神を卑小に、危ういもの、又はほとんどなきものに見せ、自分こそ神より偉大に見せようとする。天才的なうそつきである。それは自分の内側に絶望があつて地獄からのがれることができないからなのである。

サタンは神の自然の調和と秩序に反する法則を構えてそれに徹底的に居直る霊的存在である。それはその当然の帰結として、どうしても神の自然の調和と秩序を乱し破壊しなければならぬ。しかし神との直接的な戦いをせず、人を神から「罪」と「死」をもつて奪い取る。それは見事に成功した。神は自身の權威をもつて人を「罪」と「死」からあがなうことにより、サタンのわざを無効にする。そしてこのような神の權威の介入によるサタンの戦略の転覆は、来たるべき自然にたいするあがないと、慰めにみちた新しい神の国の完成とを約束してゐる。<sup>60</sup>

サタンは自分の敗北が始まり、その完成がすでにみえてゐるので、一そう絶望的に地上におけるあらゆる悪魔的な働きをしてゐる。<sup>61</sup>更にサタンの率いる悪天使たちが地上の

神々となり、民間信仰の対象となつて崇められてゐる。<sup>(2)</sup>

# 注

日本語訳聖書は、日本聖書協会訳(一九五五改定版)を用ゐた。

- (1) Oscar James Campbell, *The Reader's Encyclopedia of Shakespeare* (ed.) Thomas Y. Crowell Co., New York 1834, Toppam Co., Ltd.
- (2) John Carey and Alastair Fowler (ed.), *The Poems of John Milton* Longmans, Green and Co., Ltd. 1968, p. 131.
- この神話的な mythological figures の下には、  
no.
- (3) William Oram, *Nature, Poetry and Milton's Genii*, in *Milton and the Art of Sacred Song* (ed. by Max Patrick and H. Sundell) the U. of Wisconsin Press, 1979, p. 63.
- (4) William Oram, p. 57.
- (5) Northrop Frye "The Story of All Things" quoted by Scott Elledge in A. Norton Critical Edition:

*Paradise Lost*, W. W. Norton and Company, Inc. New York, 1975. pp. 405-422.

(6) Fowler II 895-903 n, 912-4 n.

(7) *PL* V, 469-472.

*CD* I, vii (Yale, p. 307)

... it is apparent that God would not have created this world out of nothing.

... That matter should have always existed independently of God is inconceivable.

... all things came from God.

ローマ書 11・11

箴言 1・1

イザヤ 1・1

(8) 箴言 1・1

(9) *PL* VII, 519 以下

*PL* VII, 530 以下

(10) Fowler *PL* IX, 207-8 n.

(11) *PL* VII, 506-516.

(12) *PL* IX, 209-12.

(13) Blamires, *Milton's Creation A Guide through PARADISE LOST* Methuen & Co. Ltd., 1971. p. 214.

(14) *PL* XI, 805-9. 以下は、*PL* XI, 805-9 以下

う。

ヤコブ一・五

詩篇一四五・七一〇

ペタイ六・二九・三〇

(15) *PL IX*, 214-219.

(16) *PL IX*, 205.

(17) *Comus*, 755-778.

(18) *PL XI*, 598-627.

*PL XI*, 805 七巻

(19) *Nativity*, 40.

Cf. Fowler *PL X*, 651 *n.* IX 782-4 *n.*

四一三回〇 blame は人間の墮落を意味している。

(20) William Drom, p. 49 (Cf. *Nativity*, 133-40).

(21) ロート書八・二二 (Cf. *PL X*, 650-719)

ミルトンは創世紀三・一七の意味を「自然は人間のゆえに

死、呪いは自然全体に及んだと考える。

(22) *PL XI*, 182.

(23) 創世紀四・一四

(24) 創世紀四・一三

(25) *PL XII*, 86-96. (cf. 創世紀九・六)

(26) ミルトンは「王が自然法を守らなければ臣民は反抗して

おかしな教をいつた。

W. H. Auden, Norman Holmes Pearson (ed.) *The*

*Portable Elizabethan & Jacobean Poets: Marlowe to*

*Marvell*, Penguin Books, 1978, p. xxiii,

(27) *PL V*, 468-502.

(28) ミルトンの階梯 (V 483) 及び「自然の階梯 (V 509)

よりいっしょに使っている。

階梯は gradual scale (scala naturae) である scale of nature である。

(29) *A Million Encyclopedia*, Vol. 5, p. 190 B.

(30) *An Essay on Criticism* (1711), l. 68.

(31) *PL VI*, 42. Fowler VI, 41-3 *n.*

*PL XII*, 84. Fowler XII, 80-101 *n.* (正しい理性は十七

世紀の神学論争の中の大きな watch word である)

ミルトンが「理想」という場合の正しい理性を意味して

いる ex. *PL XII*, 98.

Cambridge Platonists は正しい理性を信じていた。ミル

トンは人間は正しい理性が完全に失われたと考えるな

う。

(32) Wordsworth, *Ode to Duty*.

(33) Herschel Baker, *The Wars of Truth*, Gloucester,

Mass 1952, reprinted 1969, p. 15.

(34) *PL XI*, 523 pure nature's healthful rules.

- (35) *PL XI*, 507-25.  
 (36) *PL XI*, 603-4.  
 (37) 「生れながらの人……」  
 (38) Cf. エペソニ・三「生れながらの怒りの子」  
 (39) 第一コリント一五・四四・四六  
 (40) ローマ書一・一八—二七  
 (41) 創世記六・一二  
 (42) 創世記六・五  
 (43) *PL X*, 184 (*Fowler PL X*, 184 *n*) 蘇長錄一〇章  
 (44) ミクネ図・一四  
 (45) *PL XII*, 394. 第一ミクネ三・八  
 (46) *PL XII*, 411-14. 第二ミクネ一三・一—一  
 (47) *PL XII*, 404-419.  
 (48) *PL XII*, 420-27.  
 (49) *PL XII*, 427-435.  
 (50) *PL IX*, 25-47.  
 (51) 蘇長錄の善い殿になつてしまつた。  
     IX 12: 2-123.  
 (52) *PL IV*, 505-513.  
     今S 蘇長 IV 20-113, IV 353, IX 120-24, IX 465-70.  
 (53) *PL IV*, 114-122.

- (54) *PL IV*, 196.  
 (55) *PL IV*, 402.  
 (56) *PL IV*, 403.  
 (57) *PL IV*, 800.  
 (58) *PL IX*, 91, 182.  
 (59) *PL XII*, 464.  
 (60) *PL XII*, 544-551. 蘇長錄一一・一—四  
 (61) 蘇長錄一一・一一 蘇長錄一三・五—七  
 (62) Hooker, *Law of Ecclesiastical Polity*, Vol. 1, I, iv, 3  
     (Everyman's Library), p. 164  
     *PL I*, 358-375.